

(そのとき)天使ガブリエルは、ナザレというガリラヤの町に神から遣わされた。ダビデ家のヨセフという人のいいなずけであるおとめのところに遣わされたのである。そのおとめの名はマリアといった。天使は、彼女のところに来て言った。「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。」 中略 「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる。 -中略-」マリアは天使に言った。「どうして、そのようなことがありえましょうか。わたしは男の人を知らないのに。」 天使は答えた。「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる。 -中略- 神にできないことは何一つない。」 マリアは言った。「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように。」 -ルカ 1章-

「主があなたのために家を興す」

紀元前 1004年。ダビデの王国が揺るぎないものとなった時、王宮でくつろぐダビデは「荒れ野」時代の天幕のままであった「神の家」を立派なもので献上しようと考えます。しかし神は「家を興すのは私だ」とダビデを制しました。「真の安定」を必要としているのは神ではなく人間社会だからです。

もっともダビデの王国は、信仰によって、敵が退けられて神が築いた王国でした。しかしダビデ以後の王は、繁栄に溺れ、力に頼って神を忘れ、分裂し、国を滅亡させたのです。再び捕らわれの身となった彼らは、かつてエジプトの奴隷から解放された時、ただちに約束の地に入るのではなく、「神の民」となる信仰を取り戻すため、40年間にわたって「荒れ野の試練」を味わわされたあの教訓は全く活かされることのない不信仰な民でした

どんなに親不孝者であっても、子どもを見捨てることが出来ないのが親の心なのでしょうか。神は、わが子のために、自らメシアとなって出向くこととなります。そして、「あなたの家を建て直す」とダビデに約束した神の言葉は、千年という時を経て、乙女マリアを通して実現することになったのです。



マリアは自信家ではありません。自分がひとかどの者でないことを知っている心砕かれた貧しい人(アナヒム)です。ですから「私にはできません。しかし神に出来ないことは何一つありませんから、御言葉は実現します」と、「自分」を無にして天使ガブリエルに答え、その後は、神のはしためとして、ひたすら単純素朴に「親業」に専念する人でした。断わることも出来たのに、マリアの「はい」は、親としてわが子イエスを世に渡すことになる「はい」でもあったからです。自我を明け渡すのは、人間の力ではなく、すべて私たち謙遜な信仰者にはたらく神の恵みなのです。「いのち」は大切にされなければ「人間」になれません。マリアが世にもたらす幼子の「いのち」を、人類が母マリアのように大切にすると、私たちに用意された家、『神の

国』は揺るぎないものに立て直されるのでしょうか。「飼葉桶」の中の幼子は、私たちにそう手を差し伸べておられるのです。